

# パーキンソン病について

下浜田クリニック

荒木 弘毅 先生

パーキンソン病は馴染みの少ない割にかかる人が多い病気です。50～70歳代に多く、大脳深部にある線条体、黒質と呼ばれる部位で神経の働きに必要なドーパミンという物質が減るために起こります。症状の組み合わせは特徴的なもので、

- ①安静時の状態で手や足が細かく震える(振戦＝通常一つの手または足に始まりだんだんに四肢に広がる)
- ②起き上がる・手を伸ばすなどの動作全般が、その開始・その後の動きが今までの早さでできなくなり、のろくなる(無動)
- ③歩き方が変わる(歩き始めの第1歩がなかなか出ない、歩幅が細くなる、歩行中早足・駆け足になり自分ではどうにもできない)
- ④はずみでよろけたとき、踏み止まれず倒れる

その人により①～④はいろいろな順に現れます。一般的には1～2年の内に全部の症状が出そろい、その後ゆっくりと進行します。

治療は薬物療法が基本ですが、一部脳外科手術も行われます。このほかにリハビリテーションも併用されます。現在は多くの治療薬が開発され、治療効果も上がり以前と比べて不自由ながらもずっと長く自宅で過ごせるようになっています。

パーキンソン病の初発症状で多いのは、手や足の震え(約70%)です。初期には震えだけの時期もあり、この時期にパーキンソン病と診断するのは容易ではなく、震えを主症状とする別の病気、

- ①生理的振戦
- ②慢性アルコール中毒
- ③老人性振戦
- ④甲状腺機能亢進症
- ⑤多発性硬化症
- ⑥本態性振戦・家族性振戦

などがあり間違えられる事があります。

パーキンソン病に見られる震えは安静にしている時のものであり、それ以外の病気で見られるものはほとんどの場合、ある姿勢をとった時やある動作の最中に現れる点で区別されます。安静にしている時に手や足が震える、動作が鈍くなった、うまく歩けないなどがあるとパーキンソン病の可能性があります。一度専門外来(神経内科)で診てもらうことをお勧めします。